

シヤカの神格化について（七）

——大乘佛教・大般涅槃經（四）——

小 畑 進

七、大乘佛教・大般涅槃經（四）

序 大般涅槃經と佛身論	……	前号
1 無常垂示の思想	……	前号
2 常樂我淨の思想	……	前号
3 対機攝受の思想	……	156

3 対機攝受の思想

四相品第七には、涅槃に対する謬見をあげてこれを破しているところがある。即ち涅槃を以て「火滅して

悉く有る所無きが如し」、「衣の壞し尽くれば、名けて物を為さざるが如し」、「人の首を斬れば即ち首有ること無きが如し」、「熱鉄の椎打きりうちするに、星流れ散じ已りて、尋いで滅して所在を知ること莫きが如し」と誤解し謬想して、「正解脱を得るも亦復是の如し。已に淫欲諸有の淤泥おどろを度り、無動処を得ば至る所を知らず。云何ぞ如来常住法不変易と為すや」へ四相品第七之上・七。大正蔵一・二・六二七〜とする者があるが、これこそ邪難と云わねばならない。

「迦葉汝も亦是の憶想を作して、如来性は滅尽と謂ふべからざるなり。迦葉、煩惱者を滅するを名けて物と為さず。何を以ての故に。永畢竟ようひつぎょうの故に。是の故に常と名く。是の句寂靜、上有ること無しと為す。諸相を滅尽して遺餘有ること無し。是の句鮮白常住無退。是の故に涅槃を名けて常住と曰ふ。如来も亦爾なり。常住にして変無し。星流しやうりゅうと云ふのは煩惱を謂ふなり。散じ已りて、尋いで滅して所在を知ること莫しとは、諸の如来、煩惱滅し已りて、五趣に在らざるを謂ふ。是の故に如来は常住の法にして、変易有ること無し。復次に迦葉、諸佛の師とする所は、所謂法なり。是の故に如来恭敬供養す。法常ほうじょうを以ての故に、諸佛も亦常なり」へ四相品第七之上・七〜

要するに、佛陀は差別變化の拘束を脱した真に常住不易の真理そのものである。宇宙の真理を師とし体現した者である。そして真理が永恒不滅とすれば、その体現者である佛陀が常住不易であることも云うをまたない。

「法常を以ての故に、諸佛も亦常なり」。

法に依り、法に立ち、法を食とし、法を愛樂し、法によって進退する、法を家とし、法に住し、法と一つであるゆえに諸佛如来の身を法身と云うわけなのだ。

とは云え、迦葉は敢えて問う。

「佛の言に曰へるが如きは、『我已に久しく煩惱の大海を度す』と。若佛、己に煩惱の海を度しなば、何に縁りてか復耶輪陀羅を納れて羅睺羅を生ずる。此の因縁を以て当に知るべし。如来未だ煩惱諸結の大海を度したまはず。唯願はくば如来、其の因縁を説きたまへ」へ四相品第七之上・九。

まこと遠慮会釈なき設問ではある。だが、ここにおいてか、滔々たる佛陀自身の法身主張の長広舌がふるわれるのである。

「我已に久しく、無量劫より愛欲を離れ、我が今此の身、即ち是法身なり。世間に随順して入胎を示現す」へ四相品第七之上・九

以下、出生、修学、出家、学道、降魔、正覚など、悉く、本来の法身が世間の衆生法に随順するが故の示現であるとする。

「善男子、我此の閻浮提の中に在りて、数々示現して涅槃に入ると雖も、然れども我、実は畢竟せず。而も諸の衆生、皆如来真実に滅尽すと謂ふ。而も如来性は実に永く滅せず。是の故に当に知るべし。『是常住法、不変易法なり。』善男子、大涅槃とは、即ち是諸佛如来法界、我又、閻浮提中世間に出づるを示現す」

へ四相品第七之上・七

かくて法身なる佛陀は閻浮提において出家成佛を示現したり、禁戒を持せず、四重罪を犯すことを示現したり、さては「断善根」の縁なき衆生とされる一闍提と為ることをも示現すると説く。

しかも、無量の衆生を調伏せんと欲するが為の故に、女像を現じて女人能く阿耨多羅三藐三菩提を成ずることを示し、衆生を度せんが為の故に地獄、餓鬼、畜生、修羅の四趣に生るるを示現し、更には誘化して正法に住せしめんと欲するが為の故に淫女の舎に入るを示現する。諸の酒会、博奕の処に入り、大長老・諸王、大臣、王子、輔相となることをも示現する。これらは皆如来の善巧方便なのである。

「善男子、大涅槃とは、即ち是諸佛如來法界、我又、閻浮提中世間に出づるを示現す。衆生皆、我始めて成佛すと謂ふ。然るに我、已に無量劫の中に於いて、所作已に辦じ、世法に隨順す。故に復、閻浮提に於いて出家、成佛を示現す。我又、閻浮提に於いて禁戒を持せず。四重罪を犯すと示現す。衆人皆見て、我実に犯すと謂ふ。然るに我、已に無量劫の中に於いて、堅く禁戒を持して漏缺有ること無し。我又、閻浮提に於いて、一闍提と爲るを示現す。衆人皆、是一闍提と見る。然るに我、實は一闍提に非ざるなり。一闍提ならば、云何ぞ能く阿耨多羅三藐三菩提を成ぜん。我又、閻浮提に於いて、和合僧を破するを示現す。衆生皆、我是破僧と謂ふ。我人天を觀るに、能く和合僧を破する者有ること無し。我又、閻浮提に於いて、正法を護持するを示現す。衆人皆、我是護法と謂ひ、悉く驚怪を生ず。諸佛法爾なり、驚怪すべからず。我又、閻浮提に於いて、魔破句と爲るを示現す。衆人皆、我是波句と謂ふ。然るに我久しく無量劫の中に於いて、魔事を離れ、清淨無染なる猶し蓮華の如し。我又、閻浮提に於いて、女身佛と成るを示現す。衆人之を見て、皆甚だ奇なり、女人能く、阿耨多羅三藐三菩提を成ずと云ふ。如來畢竟女身を受けず。無量の衆生を調伏せんと欲するが爲の故に女像を現す。一切諸の衆生を憐憫するが故に、復種種の色像を示現す。我又閻浮提の中、四趣に生ずるを示現す。然るに我、久しく已に諸趣の因を斷ず。業因を以ての故に四趣に墮せんや。衆生を度せんが爲の故に是の中に生ず。我又閻浮提の中、梵天王と作ることを示現して、梵に事ふる者として正法に安住せしむ。然るに我實は非、而も諸の衆生は咸く皆、我真の梵天と爲ると謂ふ。天像を示現し。諸の天廟に徧うするも、亦復是の如し。我又閻浮提に於いて、淫女の舎に入るを示現す。然るに我、實は貪欲の想無く、清淨にして汚れざること、猶し蓮華の如し。諸の貪淫著色の衆生の爲に、四衢道に於いて妙法を宣説す。然るに我、實は欲穢の心無し。衆人、我女人を守護すと謂ふ。我又閻浮提に於て、青衣の舎に入ると示現す。誘化して正法に住せしめんと欲するが爲なり。然るに我、實は是

の如きの悪業、青衣に墮在すること無し。我又閻浮提の中、教師と作るを示現し、童蒙を開化して正法に住せしむ。我又閻浮提に於いて、諸の酒会、博奕の処に入るを示現す。種々の勝負、諍訟を示現して、彼の諸の衆生を拔濟せんと欲するが為にす。而も我、實は是の如きの悪業無し。而も諸の衆生、皆我、是の如きの業を作すと謂ふ。我又、久しく塚間に住して大鷲の身と作るを示現し、諸の飛鳥を度す。而も諸の衆生皆、我是真実の鷲身と謂ふ。然るに我、久しく已に是の業を離る。彼の諸鳥鷲を度せんと欲するが為の故に、是の如きを示現す。我又閻浮提の中、大長者と作るを示現す。無量の衆生を安立して、正法に住せしめんと欲するが為なり。又復示して諸王、大臣、王子、輔相と作る。是の衆中に於て、各第一を為す。正法を修せんが為の故に、王位に処す。我又閻浮提の中、疫病劫起り、多くの衆生有りて、病に悩まされ、先に医薬を施し、然して後に、為に微妙正法を説き、其をして、無上菩提に安住せしむるを示現す。衆人皆、是病劫起ると謂ふ。又復閻浮提の中、饑餓劫起り、其の所須しよじゆに随ひて飲食を供給し、然して後、為に微妙正法を説きて、其をして、無上菩提に安住せしむるを示現す。又復閻浮提の中、刀兵劫起り、即ち為に法を説き怨害を離れしめ、無上菩提に安住することを得しむるを示現す。又復示現して、計常想けいじやうそうの者の為に無常想を説き、計樂想けいらくそうの者の為に苦想を説き、計我想けいごそうの者に無我想を説き、計淨想けいじやうそうの者に不淨想を説く。若衆生の三界に貪著する有らば、即ち為に法を説きて、是の処を離れしむ。衆生を度するが故に、為に無上微妙の法薬を説く。一切煩惱の樹を断ぜんが為の故に、無上法薬の樹を種植しゆじゆす。諸の外道を拔濟せんと欲するが為の故に、正法を演説す。復示現して、衆生の師と為ると雖も、而も心初しんしよべて衆生の想無し。諸の下賤を拔濟せんと欲するが為の故に、現じて其の中に入りて、為に法を説く。是悪業、是の身を受くるに非ざるなり。如来正覺、是の如く大般涅槃だいぱんねはんに安住す。是の故に名けて常住無變と為す。閻浮提の如く、東弗于逮とうふつうたい、西瞿耶尼さいくわかやに、北鬱单越ほくうつたんをつも亦復是の如し。四天下の如く、三千大千世界も亦復是の如し。二十五有、

首楞嚴經の中に広く説くが如し。是を以ての故に大般涅槃と名く。若菩薩摩訶薩、是の如きの大般涅槃に安住する有らば、能く是の如きの神通變化を示して畏るる所無し。迦葉、是の縁を以ての故に、汝羅睺羅は、是佛の子と云ふべからず。何を以ての故に。我往昔、無量劫の中に於いて、已に欲有を離る。是の故に如来、名けて常住にして変易有ること無しと曰ふ」(四想品第七之上・七)

まこと、ここにいたって下からの方方便涅槃は、上より衆生済度のための随順示現として、対機摂受のゆえとして説明されるにいたったのであり、佛身常住観はいよいよ上・下両面より明らかにされるのである。

それにしても、「誘化して正法に住せしめんと欲するが為に」、或は淫女の舎に入り、酒会、博奕の処に入りし、下賤を拔濟せんと欲するが為の故に現じて其の中に入り法を説く、と云ったくだけは、自己の安心立命に汲々たる小乗の徒の思っても見ざる処であつて、かのパリサイ輩の侮蔑罵言の中にも罪人、取税吏、遊女と食を共にし、姦淫の女に暖かくも鋭き言葉をかけてこれを救うイエス・キリストの面影さえ浮かんでくるようである。このあたり、『涅槃經』の Cur Deus Homo の感がある。新約聖書より二、三引用、参照しよう。

「我等には、もろもろの天を通り給いしおほい偉なる大祭司、神の子イエスあり。然れば我らが云ひあらはす信仰を堅く保つべし。我らの大祭司は我らの弱きを思いやること能はぬ者にあらず、罪を外にして凡ての事、われらと等しく試みられ給へり。この故に我らは憐憫を受けんが為、また機に合ふ助けとなる恵を得んがために、憚らずして恵の御座に来るべし」(ヘブル書四章一四―一六節)

「汝らキリスト・イエスの心を心とせよ。即ち彼は神の貌にて居給ひしが、神と等しくある事を固く保んと思わず、反つて己を空しうし僕の貌をとりて人の如くなれり。既に人の状にて現れ、己を卑しうして死に至るまで、十字架の死に至るまで順ひ給へり。この故に神は彼を高く上げて、之に諸般の名にまさる名

を賜ひたり」(ピリピ書二章五―九節)

「われ凡ての人に対して自主の者なれど、更に多くの人を得んために、自ら凡ての人の奴隷となれり。我ユダヤ人にはユダヤ人の如くなれり、これユダヤ人を得んが為なり。律法の下にある者には―律法の下に我はあらねど―律法の下にある者の如くなれり。これ律法の下にある者を得んが為なり。律法なき者には―われ神に向ひて律法なきにあらず、反つてキリストの律法の下にあれど―律法なき者の如くなれり、これ律法なき者を得んがためなり。弱き者には弱き者となれり、これ弱き者を得んためなり。我すべての人には凡ての人の状に従へり、これ如何にもして幾許かの人を救はんためなり。われ福音のために凡ての事をなす。これ我も共に福音に與らん為なり」(第一コリント書九章一九―二三節)

期せずして、佛基両教の衆生濟度、対機たいき攝受しやくじゆの精神は、かくも共鳴していたのである。もつとも、イエス・キリストの史実であるのに対して、「涅槃經」のほうは創作であることを別にすればのことである。更に基督教においては、救主として人と成りし子なる神キリストは、人間の最底辺に降誕すべくナザレの名もなき賤女マリヤの胎を選び、しかも獣畜の汚物をもつて穢れし飼葉桶に生まれ落ちたところは、王族の太子として生をうけた佛陀と異なるところである。

(次号につづく)